

木箱にのった漂流

アラン・ベイリー 作 久米穰 訳 こさかしげる 絵



木箱にのった漂流
文研じゅべにーる

訳 者 久米 穰
発行者 佐藤武雄
印 刷 岩岡印刷株式会社
発行所 **文研出版**

東京都文京区向丘2-3-10 ☎113

電話 03-814-2151

大阪市天王寺区大道4-3-25 ☎543

電話 06-779-1531

NDC933

© 1986.9 M. KUME S. KOSAKA

木箱にのった漂流

文研出版 1986

192p 23cm 菊判 (文研じゅべにーる)

〈検印廃止〉

- 落丁・乱丁はおとりかえします。
- 定価はカバーに表示してあります。

木箱にのった漂流

アラン・ベイリー 作

久 米 穰 訳

さか しげる 絵



もくじ

I	めいわくなおも	6
2	ふしぎな木箱 きばこ	16
3	漂流 ひょうりゅう の始まり	33
4	いまわしい思い出	42
5	ついらく!	59
6	霧 きり の海の歌	68
7	たすけの船だ!	79
8	人食いザメだ!	99



	16	15	14	13	12	11	10	9
あとがき	奇跡 ^{きせき} の太陽	ネブが消えた	海底怪獣 ^{かいじゆう} バンボーラ	不吉 ^{ふきつ} な前ふれ	白 ^{つひ} い追跡 ^{せき} 者	サリー ^の 馬	赤シャツ ^の 帆 ^ほ	ひきょうなパパ
190	175	165	154	147	137	130	115	108



画家 こさかしげる
1925年、東京生まれ。日本美術家連盟、春陽会、童美連会員。第21回小学館絵画賞を受賞。絵本、さし絵のほか、各種展覧会に創作活動が続けている。出版の作品に「家出—12歳の夏—」「ふたりの花どけい」「スナガリー川の姉妹」等多数。佐久市立近代美術館に作品収蔵。
現住所 = 東京都杉並区下井草3-11-13

原作者 アラン・ベイリー
1943年、スコットランドに生まれる。7歳の時、オーストラリアに移住。「木箱にのった漂流」(原題Adrift)は、ある新聞に、地中海で四人の少年と一匹の犬が、箱に乗って漂流したという実話記事がのり、それをたまたま、切り抜きで読んだのがヒントになったという。本編は、イギリスで8歳から12歳向けの児童文学の新人作家に与えられるカサリーン・フィドラー賞の第1回受賞作品である。

訳者 久米 糺
1931年、神奈川県鎌倉市に生まれる。文化学院文科卒業。日本児童文芸家協会評議員、日本児童図書評議会員<J B B Y>少年文芸作家クラブ理事。訳書に、「悲劇の少女アンネ」「ひとときのヒーロー」「スポック博士のしつけ教育」。創作に「へんしんバットのひみつ」など。
現住所 = 東京都千代田区三番町7-10-1002号

“ADRIFT”

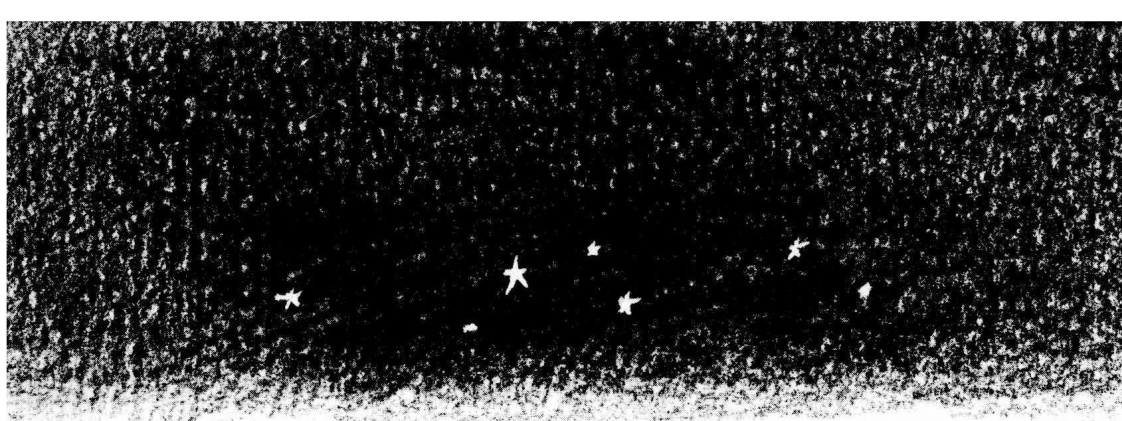
Text copyright © 1983 by Allan Baillie

All rights reserved

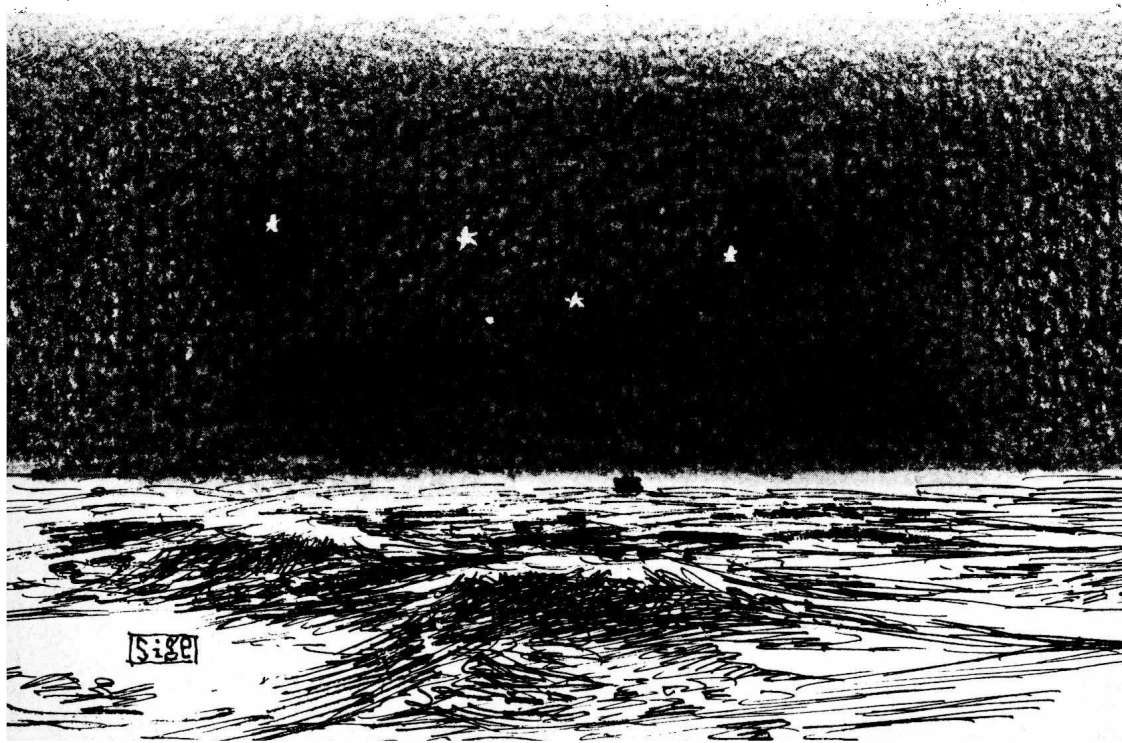
Japanese translation rights arranged with

Blackie and Son Ltd., London through

Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo



木箱にのった漂流



1 めいわくなおとも

フリンは、灰色はいいろのまる石から、ぴよんととびおると、一面に筋すじがついた平たい岩盤がんばんの上を、海にむかつてあるいていった。一步ごとにプラスチックのバケツを肩かたの高さまでふりあげ、なかに入れた釣り糸やミドリエビ、肉の切れはし、ポケットナイフなどをにらみつけた。

きょうは、こいつは家の台所においてきたほうがよかった。遊ぶひまなんかありっこないんだから。

フリンは自分のまわりを、チョロチョロしている妹とネコを、相手にしないことにした。これは、手伝いなんでもんじゃない。お仕置しおききだ。

「ねえ、待ってくれたっていいでしょ。」

二十メートルくらいうしろで、妹のサリーが、岩のさけ目をすべりおりながら、声をかけてきた。いつものように、兄にむかつていばった口をきいている。

「だいたい、おまえがおそすぎるんだぞ。」

とはいったものの、フリンは立ちどまった。

「だって、わたしのほうが、足が小さいんだもの。」追いついてきたサリーは、ハアハア息を切らしている。「手をつないでくれたっていいでしょ。」

「いやなこった。」

だれかが、どこから見ているかもしれない。

「どうして——」　　「またもふくれつたら。」　　「パパいったはずよ——」

「パパがなんていおうと、いまは関係ないさ。おれ、ただ、おまえのこと見ていろつていわれただけだもん。」

サリーは肩かたをすくめた。

「じゃあ、わたし貝をさがしてもいいわね？」

「ふん、かつてにしろ。」　　「いつてからフリンは、妹にうまくしてやられたことに気づいた。サリーは、フリンの気が変わらないうちに、」　　「おいで！　ネブ！」　　「と、呼びかけながら、ぱつと、先に走っていつてしまった。」

ネコは、打ちあげられてかれた海草なまこの束からとびあがった。波うつ黒い風となつて、定規でひいたようにまっすぐな、岩の溝みぞや、くぼみにたまつた水のなかにひそむ獲物えものをねらい始めた。フリンはネコを呼びよびもどそうかと思つたが、あきらめて、たまり水の魚やカニをさがしながら、足どりも重くあとからトボトボとあるいていった。

（あと、一時間のしんぼうだ）と、フリンは考えた。二人と一匹はそびえ立つ大岩のほとりへと近づいた。波がだんがいからけずりとった、大きな石がゴロゴロしているところだ。
8
フリンは、いまこの地で夏休みをすごしていた。というか、両親はそういつていた。だが、フリンにとっては四週間の押しこめといったほうがびったりで、学校にもどるのが楽しみにさえなってきた。

いや、これは本心だ。この夏ママは、お金をかけないで休暇をすごそうと計画した。そのため、さえないパパ、ガミガミママ、大きな妹のサリー、そして、やんちゃのフリンのネイル一家は、バンクスタウンから、シドニーを通りすぎて、アバロンに住んでいるママの弟の家に滞在しているのだ。

楽しく遊べる子どもなんて近所にひとりもない。

「モアおばさん」——本名のモーリンをつめてこういう——と呼ばなければならない太った中年の女の人と「ノームおじさん」きりだ。

しかもノームおじさんときたら、相手かまわず、サリーにまで、自分がどんなにうまくテレビの広告をつくっているか、じまんせずにいられないのだ。ここで、フリンにできることといえば、海辺にいったって、カツオノエボシ（クラゲの一種）をたくさんふくんだ大波を頭からかぶって全身びしょぬれになり、砂浜にころがって、日に焼かれ、木を見あげたり、岩の

上で貝をさがしたりするだけなのだ。

それから、ああ、そう、サリーのおもりだ。

「パパの口ぐせだ。」フリンはそういうと、ねこ背になり、腕をだらんとたらし、下くちびるをつきだして、ドタドタとあるき、ゴリラそっくりのかっこうをしながらつぶやいた。

「サリーをびてろ。サリーをびてろ。びてろ。びてろ。びてろ。ウツホ。ウツホ。」

げんこつを岩にひきずって、あるきだしたところへ、サリーが、手いっぱい、貝や波にあらわれた石を持って走ってきた。サリーは立ちどまると、だまってフリンをながめ、ネコをながめ、それから、また、フリンが自分に気がつくまで見つめつづけた。フリンはやっとサリーの足に気づき、立ちどまって、体をまっすぐにのばした。

「フリン、なにしてるの？」

「おれになんの用だよ？」フリンはサリーとネコをどなりつけた。ネコが自分をあざわらっているにちがいないと思ったのだ。

「ねえ、貝をバケツに入れてもいい？」

「だめ。」

「なぜ？ どうしていけないの？」

「ううん、もう。かってに入れろ！」

サリーは手のなかのものを全部バケツに入れ、岩かげにむかつて、ピョンピョンはねていった。日に焼けた腕、色あせた緑色の水着、生き生きと動いているむっちりした小さな足、ハチミツ色の髪の毛の上では、大きな麦わらぼうしがおどっている。

ネコはフリンにむかつてしっぽを立てると、サリーのあとから、影のようになめらかに体を動かしながら走っていった。

一瞬、フリンはネコに石をぶつけてやりたいと思った。

ネコにかんしてだけは、フリンと父には共通点があった。二人ともこのネコがきらいだったのだ。

ひげの先からしっぽの先までまっ黒で、動くたびに毛がキラキラ青く光るのだ。家のまわりをうろうろさせておけば、人だかりがするほどだった。

しかし、まずいことに、このネコ——ネブは、自分が魅力的だということを知っているのだ。意識して、中国の皇帝のようないばったムードをただよわせ、その黄色い目で、お皿をひっくり返されて怒っているイヌや、飼い主の父をにらみつけるのだ。

じつをいうと、フリンはこの夏休みに期待していた。

バンクスタウンのイヌたちは、一頭のこらずネブのことをこわがっていたが、この北部の野性的な動物は、ネブなど、まったく恐れないうと。こちらのイヌ、たとえば小型

のプードル犬にでも追いつめられて、木にのぼった皇帝ネブの姿が見られるかもしれない。しかし、残念ながら、まだそういう光景は見られなかった。さつき浜辺をあるいていた時、ゆうかなボクサー犬が、ほえかかってきたのだが、ネブがフーツとうなると、だまってしまった。イヌがおびえて、同じところをぐるぐるまわったところで、ネコはさらにおどかして、追っぱらってしまった。

というわけで、ネコは二人について岩まであるいてきたのだ。おそらくさつきのイヌも、ママがネコにつけた名まえがぴったりだと思っっていることだろう。

母はバンクスタウンにこしてきてすぐに、ネコをサリーにあたえたのだが、その時、「このネコは、アビシニアのクーガーみたい。」だからといって、ネブカドネザルと、名づけたのだ。

これは、ネコとしてはまったく変な名まえだ。ネコにむかって、このたいそうな名をさけんでいるまにも、台所のテーブルからソーセージを盗んでのみこみ、さらに腹をすかしてつぎの獲物をねらうだろう。ネブカドネザルが、エジプトのファラオ時代の皇帝であることを、フリンは知っていたが、サリーはこの長たらしい名まえがいえず、ただネブと呼んでいた。それに、どうしてこんなネコを飼わなければならないんだ。肩にとまる赤や青や黄色のオウムのほうがずっといいではないか！

「おい、おまえら！」

フリンは海賊の船長のまねをして目をつぶり、右足をつっぱらせ、足をひきずって岩のまわりをあるきまわった。

サリーがいつしようにけんめい手をふって指さしている。ネコが日かげになっっているたまり水のわきに、ほとんど身動きせずじっとしている。片ほうの前足をあげ、しつぽをピンと空中に立てて、ゆっくりと頭を持ちあげ、目は水中のなにかをじっと見つめている。とつぜん、あと足をもそもぞさせると、水にとびこんだ。

「ネブは、なにか見つけたんだわ！　そうよ！」

サリーは、もつとよく見ようとして、めっちゃめっちゃに重なりあっている岩の山をよじのぼっていった。

ネブカドネザルは、もがいているカニをくわえ、たまり水のなかに立っていた。

（どうだ！）といわんばかりに、ほこらしげにサリーのほうをふりむいた。フリンも感心してしまった。

その時、カニが、はさみでネブの鼻をはさんだ。

ネブはすぐにカニをはなし、ぐるぐるまわりながら、ないてさわぎたてた。カニは、ネブが悲鳴をあげるために口をあけたとたんに、はさみを開き、たいらな岩の上に落ちてい



た。

「ネブ！」サリーはびつくりしてさげんだ。

ネブはさわぐのをやめ、鼻にしわをよせると、前足で鼻をこすって、もうカニがいないのをたしかめると、まるで、（なんとかしろ。）とでもいうように、フリンをうらめしげに見つめた。だが、フリンは、わざととりあわなかった。

カニは死んだように動かなかった。ネブは、それを見ているうちに、目を獲物えものをねらう狩人かぎやうどのように光らせ始めた。自分でつかまえてやろうと思ったのだ。岩に腹はらをこすりつけるようにして、カニめがけてはい進んでいく。フリンも、息をひそめて、見つめた。

ネブはカニのところまで近より、ほんの少しだけいきすぎて、高くなっている岩の上のぼった。三角形の耳を大砲たいほうの回転砲塔くわんぱうたうのように、なん十度もまわしながら、カニがそろそろ、うしろの水のなかにすべりこんでいくのを、じっと見つめていた。

フリンは岩の上にすわり、げらげらわらいだした。とつぜん、きょうはここなんカ月かでいちばん楽しい日になった。ネブはカニから目をはなし、ツンとだまりこんでフリンを見つめていた。

「ネブ、おまえってほんとに、おばかさんなネコなのね。」

サリーは悲しそうにいうと、ネコから目をはなし、頭の上にそびえている大きな岩を見

あげた。がけの上にも、地滑りしたあとにも、白いデイジーがたくさんさいている。あとで
つみにいかなきゃ。サリーは景色に見とれながら、こんどは海のほうをふりむいてみた――

「フリン！」

サリーは大声でさけんだ。

「なに、あれ！」

